

審査結果の要旨

氏名 崎山 治男

本論文は、感情社会学という新しい領域において、これまでの研究成果を整理し、それらを「文明化」論という巨視的な理論のうえに載せることによって相対化しつつ、感情労働という対象について、これまで指摘されてきたものとは質の異なったものがあることを例示し、それを実証的に分析することをつうじて、感情管理が進む現代社会においても、それに対抗する自己の技法によって自律的に生きぬく道があることを示そうとしたものである。

全体は序章と9つの章および終章からなり、序章では上記の問題意識を述べている。ついで第1章では、感情経験を社会的に分析することの意義を述べ、感情性と合理性の相克を、感情管理化の方向に乗り切っていくとするのが現代社会の特徴であることを指摘する。第2章は、こうした事態を分析するために、感情社会学が構成主義の立場を取らねばならぬことを述べながら、それにも言語によるアプローチにとまらぬ限界があることを確認している。

ついで第3章は、感情管理化社会を主題化するために、その進む現代社会がじつは、近代以前から進行してきた文明化という感情管理の延長上にあることを述べたものである。ノルベルト・エリアスの理論のうえにこれまでの感情社会学の成果を載せたこの章の議論は、感情社会学の基礎を広げるとともに深め、現代社会の感情管理化を広い視野から奥行きを配慮しつつ問題化する基礎作業の意味をもっている。

第4章から第7章までは、こうして可能になった広く深い視野から、初期感情社会学の主題であった感情労働の問題を取り上げ、それを狭い意味でのジェンダー論的な文脈から切り離して、看護労働という、生死にかかわるという意味でより深く、かつ緊迫した対象に即して考察したものである。看護労働においては、感情性と合理性の相克が、後者の貫徹の方向に管理化されるという過程が一般化するとは限らず、感情性が合理性よりも重視されたり、両者の組み合わせが個別主義的あるいは普遍主義的に構成されつつ採用されるという、さまざまな自己の技法をつうじて、看護師と患者との関係および患者の罹病・闘病・感情経験を有意義的に管理することに役立つことが示される。

第8章と第9章は、これを、慢性疾患患者および急性疾患患者の看護における感情管理に即して、事例分析したものである。綿密な聴き取り調査をもとにおこなわれている分析は、第7章までの議論を裏付けつつ、本論文全体の説得力を増大させるに十分な効果を持っている。終章は、こうした全体の議論をふまえて、現代社会と現代人の脱「感情管理」化への展望を述べたものである。

こうして本論文は、これまでの感情社会学の基礎を広げ、そのうえで感情管理および感情労働の概念を拡張して、これまでに指摘されてきたジェンダーがらみの感情管理とは異なった、ある意味でその対極ともいえる感情労働や感情管理があることを実証しつつ、感情社会学の新たな展開に道を開いた画期的な業績といえる。

よって審査委員会は、本論文が博士(社会学)の学位を授与するに値するものと判定する。